

〔記事〕

「1992年度第2回立教経済学研究会例会」
報告

去る1993年2月9日（午後2:00～5:00）廣江彰氏を報告者にむかえ、「技術革新の労働に対する影響，とりわけ『労働の二極化』をめぐって一名和・秋野両氏の所説をてがかりに一」をテーマとして，立教大学研究会例会が開催された。なおコメンテータとして，名和隆央，秋野晶二両氏がこの例会に参加しコメントをいただいた。廣江彰氏の報告の要約を以下に掲載する。

1993年2月9日（火），立教経済学研究会例会報告要旨

廣江彰氏（本学経済学部教授）

報告テーマ：技術革新の労働に対する影響，とりわけ「労働の二極化」をめぐって一名和・秋野両氏の所説をてがかりに一

本報告の主旨は，技術革新によって引き起こされるとする「労働の二極化」説を批判的に検討することである。研究会では本学部同僚教員であり，当該領域で研究成果を持つ名和，秋野両氏の論説を取り上げ，報告へのコメントをお願いした。

本報告の問題意識は次のようなものである。技術革新の労働に与える影響の評価，さらにはその延長上での「労働の二極化」説批判は，『中小企業とME革命』（1989年，中小企業リサーチセンター）所収の拙稿で既に結論を得たテーマであって，その意味では私にとって過去の問題に他ならない。しかし，近年の「ポスト・フォーディズム」論争にみられるように，技術革新と労働のかかわりや，日本の中小企業の持つ経済的な「パフォーマンス」をどう評価するのかといったテーマに関連して，「フォーディズム」，「テイラリズム」の検討，特に日本でそれらを検討することのかかわりで再度「労働の二極化」を取り上げることには意義があると考えられる。そこで，

第1にかつて行なわれた「労働の二極化」説をめぐる議論の意義を明らかにすること，第2に「労働の二極化」説の批判的検討を通じて，「ポスト・フォーディズム」論でいわれる「日本的経営」評価を検討すること——この2点に関連させて上記テーマを報告した。なお，この二つの論点を結ぶものは労働における「熟練」の理解であり，また，「熟練」の分析を試みたテイラーの「科学的管理法」であり，さらに，その日本への導入と改編に基づく日本的「テイラーシステム」である。

報告では「労働の二極化」を論議する際のいわば「古典」ともなっているハリー・ブレイヴァマンの所説を取り上げ，それを「労働の二極化」の主張であると看做すことへの疑問を提示し，むしろアメリカでの熟練工の歴史的位置と，それへのテイラリズムの対抗関係がどのようなものであったのかという側面から検討すべきことを主張した。したがって，報告ではテイラー『科学的管理法の原理』，『金属切削技術の研究』をやや詳細に検討し，テイラーが熟練工の重要な基盤であった金属切削法を科学的に解明することによって，労働を要素作業に分解し，その再結合によってどんな複雑な労働をも標準化しようと試みたこと，またそのことによって労働の組織的過程を再編成しようとしたことを説明した。だから，テイラリズムを反映した対抗的労使関係の枠組みの中で「熟練」分解を分析したブレイヴァマンの所説を，「労働の二極化」説と看做すのはあやまりであることを強調した。

テイラリズムもしくは「科学的管理法」の日本への導入とその労働への影響は，アメリカとは大きく異なる。とくに，日本では導入過程で「熟練」の解体が進まず，効率改善といった面では共通するものの，むしろ労働者の「主体的」な構想力を活用してきた。この点がブレイヴァマンの分析対象とは決定的に異なるところであり，したがってその所説を，現代日本における「労働の二極化」説とひと

つに括ってみても生産的な議論には結びつかない。また、「科学的管理法」の導入、定着、さらには発展過程の独自性が、後に「日本的経営」もしくは「トヨタ生産方式」を始めとするフレキシブル・システムとして、ポスト・フォーディストの評価を受けたわけであるから、「科学的管理法」導入と発展の独自性を踏まえた上で、日本の技術革新による労働の「労働の二極化」説を扱うべきであって、「二極化」か「高度化」かといった視点は余り有効な議論ではないことを主張した。従来から私の主張してきたように機械、ことにME機械の導入は生きた人間労働を原理的に排除することで、その限りでは労働の単純化を決定的に推し進めるのであって、その上で新たな職務編成を行って新たな「熟練」が作り出されることは、「二極化」か「高度化」かといったこととは違った論理レベルの問題に他ならない。むしろ、日本ではアメリカ型の「熟練解体」ではなく、何故ME化によって新たに編成される職務においても労働者の「構想力」を引き出そうとするのか、この点での歴史研究を含む実証的・理論的検討が必要であることを、本報告では強調した積もりである。(以上；廣江 彰)